

人間の身体性と建築の関係を指して

—通過点としての建築—

A study on the relationship between human body and architecture.

-Toward An architecture that serves as a passing point.-

○伊勢萌乃¹, 田所辰之助²*Moeno Ise¹, Shinnosuke Tadokoro²

Abstract: This paper seeks to the relationship between human body and architecture. In this paper, we analyze the body from the fields of architecture, art and philosophy and explore the relationship between the body and the architecture. This paper consists of seven chapters. The 1st is research background and purpose. The 2nd is research methods. The 3rd is about the body. We analyzed the meaning of the words of the body. The fourth analyzes the perception, consciousness, behavior, the fifth is Frederick John Kiesler's space, and the sixth is Antony Mark David Gormley's physicality. The seventh is conclusion. As a conclusion, the body is a state where the spirit and the body occur simultaneously. We are interested in passing through consciousness.

1. 研究背景と目的

今まで様々な観点から建築を学んできて「建築とは、人間の身体の一部になるもの」という考えが私の中にある。これは、建築が時に、人間の行為を補助する役目を果たしたり、悲しみや喜びを分かち合う空間であったり、身体の制限を壊す建築にいままで出会ってきたからである。もし、建築が身体の延長線として身体の一部になったら、建築や身体にどのような影響を与えるのか。また、そもそも建築が身体の一要素になることは可能なのか。

人間は、建築と人との間に「モノ」があり初めて建築を認識する。これが、建築と人の関係になり切れない原因であると考えた。これは悪いことではない。しかし、「モノ」があるから、建築と人間の身体的な距離が一定以上埋まらなくなっていると考えた。「モノ」の存在が消えた時、人々は建築を認識することが出来なくなるが、その代わりに、身体とより親密な関係の建築が生まれるのではないか。人々に意識してもらえない建築を設計することで、身体の一部となる建築が可能になると考え、研究を行うことにした。さらに、記憶に残る場所、意識が通過する場所を私（設計者）が意識することで、身体の行動がより豊かになる建築が生まれるのではないかと考える。

2. 研究方法

「身体」は、建築や建築以外の分野でもよくテーマとなっている。建築では、フレデリック・キースラーやアーキグラム、オスカー・シュレンマーを、アートでは現代アートを、哲学では、アンリ・ベルクソンを

研究対象として「身体と建築」の關係に着目し分析する。

3. 身体について

初めに、そもそも根本的な「身体」とは何かという問いに対して、辞書によると、(精神の宿るものとしての)人のから

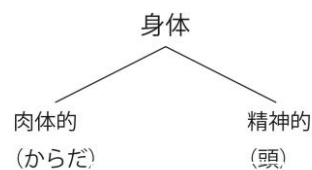


Figure 1.身体図

だの意の改まった表現という意味であり、体は、人間や動物、物体まで幅広く使用されるが、心や精神、地位や立場などを持つのは人間だけなので、身体はほぼ人間に対してのみ使用される言語である^[1]と記されている。つまり、肉体的なもの(体)と精神的なもの(脳)が一緒になって初めて身体となることが理解できる。また語源は、殻に接続語「だ」が付いた語。古くは、魂に対してそれを宿している身体。生命の宿らない肉体を「からだ」といい、魂を宿した肉体は「身」と言った^[2]と記されている。つまり、人間が生きていることを表す言語であると理解できる。

4. 知覚、意識、行為について

人間の知覚、意識、行為についてアンリ・ベルクソンの「物質と記憶」を中心に考究する。

知覚とは、すべてのものが互いに作用、反作用を及ぼし合っているこの宇宙全体の中で(物質)、我々の身体に利害関係を持つものを浮かび上がらせ、残りのものは我々の身体を素通りしていくに任せることのうちにある。^[3]つまり、私たちは知覚することによって物

1: 日大理工・学部・建築、2: 日大理工・教員・建築

事を制限しているのであると考えられる。

意識とは、現実生きられたもの、行動するものの特徴である。つまり、いくつかの可能な行動から選択を行う場合に意識が現れる。^[4]

行動つまり現在の瞬間とは、ベルクソンによると「直接的未来と直接的過去に食い込んでいる」。^[5]ここで言われる、直接的未来とは、自らを限定していくもの。(運動)^[6]直接的過去とは、知覚、直接的未来の限定でなければならない。(感覚)^[7]つまり現在は、運動と感覚が同時発生している状態である。よって現在は、身体の状態であると考えられる。

5. フレデリック・キースラーの空間

フレデリック・キースラーの作品の中に「エンドレス・ハウス」がある。名前の由来は、「円には終わりが無い」ということと、円い家は人類のはじめからあるということから付けられている。^[8]丸山洋志氏は、建築文化の「身体=環境モデル」の記事の中で、エンドレス・ハウスの経験において、生じてくる「空間」は、身体を媒介した「行為的直観」を経験するための、あるいは感覚的実現を実現するための「場所」ということになるのではないかと。^[9]キースラーにとっての建築=内部とは、知覚に端を発した身体的行為の実現、すなわち「身体そのもの」と言えよう。例えば、エンドレス・ハウスを地面から支えている幾つかの柱脚は、その内部の経験者と共に身体化した空間が自らの環境配置を形成しようとして生成する、文字通りの「身体としての足」なのである。^[10]と記している。

彼の作品を見た時、子宮の内部が頭に浮かんだ。もしかしたら、私たちにとって初めて空間を知覚するのが子宮なのかもしれない。また、彼は、身体=環境としての建築を試みていたとすれば、身体の一部となった建築は環境に近い存在になるのではないかと。



Figure2.エンドレス・ハウス

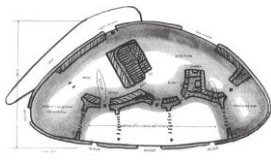


Figure3.エンドレス・ハウス 平面図

6. アントニー・ゴームリーの身体性

アントニー・ゴームリーの作品の特徴は、自分の体を使って、身体に宿っている人間の潜在的な意識の世界を表現し



Figure4. HOME OF THE HEART

たことである。彼は、物質社会の中で、様々な問題の中にある人間の精神を、いかにしたら救済できるかという思想を持っていた。「HOME OF THE HEART I」は、直方体コンクリートの塊の中に、自身の体を形取り、空洞を残したという作品である。^[11]

自身の体を使うことで、そこに人間がいたという跡が生々しく残り、またそれが空洞であることにより、そこに精神だけが取り残されたように感じ取れる。この作品から「生」を感じることが出来る。

7. 結論

「身体」の考察から、身体は肉体と精神が同時に発生している状態、生きている状態であり、それが現在であることが分かった。これら身体の動きの中に建築が入ったらどうなるのかということキースラーやゴームギーの作品を基に考えていきたい。現段階で分かっていることは、建築は、人間から見て物質同様知覚するものだ。よって、記憶と深い関係にあることが分かる。その中でも、滞在的記憶^[12]と関わりが深い。滞在的記憶では、身体に染み着いた感覚で行動する。この時、身体の動きは意識を通り越す。つまり、感覚に染みついているため、認識よりも先に行動に移せるのである。この行動を意識の通過と呼ぶことにする。一日の出来事を思い返した時、残念ながら細部までは思い出せない。これは、生きるために必要ないと判断したため、意識が通過しているからであると考えられる。私は、この意識の通過という点に興味を持った。以上のことを絡めながら建築設計に取り組みたい。

8. 参考文献

- [1] 見坊豪紀他『新明解国語辞典 第三版』三省堂、1983年「サイト-体と身体の違い」<http://ot8.jp/archives/537> (最終閲覧日: 2017.09.13) [2] 見坊、前掲書著書 [3]-[7] アンリ・ベルクソン編、合田正人、松本力訳『物質と記憶』筑摩書房、2007年 [8] 宮内嘉久編集事務所編、「フレデリック・キースラーの回想」、『国際建築』、美術出版社、1961、pp.59-67 [9] 丸山洋志、「身体=環境モデル」『建築文化』彰国社、2001、pp.37 [10] 丸山洋志、「身体=環境モデル」『建築文化』彰国社、2001、pp.38 [11] 伊波サチヨ、「現代美術にみる身体性としてのテクノロジー」、筑波大学大学院芸術研究科修士論文、1996「サイト-アントニー・ゴームギー」<http://www.antonygormley.com/sculpture/chronology-item-view/id/2023/page/561> (最終閲覧日: 2017.08.04) <http://art-education.shide-n.com/?eid=25> (最終閲覧日: 2017.08.04) [12] 滞在的記憶…繰り返した体で覚えていく記憶のことである。高橋駿「身体で覚えるとは？」出版年月不明